

しんぎよう

浄土真宗本願寺派（西本願寺）

真楽寺報

令和三年六月

繋がれているという譬えで表現されています。

古代インドに於いて理想的な

王と考えられたのが「転輪聖王」

（転輪王、輪王）という概念で

す。釈尊のお説教を転法輪と表

現されますが、転輪聖王は仏法

によつて世を治める王、決して

武力を用いることなく仏法によ

つて世の中を統一していく王の

姿がイメージされます。ブツダ

の姿と等しい三十二通りの特徴

が有り、もし仏道を求めれば覺

りを開き仏となる力を備えてい

るとされます。

さて、転輪王の子も、その優

れた資格が備わっているので

すが、姿形が同じだからといっ

て、中身が同じとは限りません。

仏法に基づいて慈心をもつて世

を治める王に対して罪をなすと

いうことは、仏法に背くという

ことでしよう。王子ですから常

人に超える権力があるはずで

す。父王は子の暴走を止める為

には宮中に閉じ込めるしかあり

ません。七宝の宮室の中、飲み

物食べ物、着る物、ベッドに寝

具、華も香りも音楽も、何の不

足もない、…筈なのに、どう

でしようか。王子はこの宮室か

ら逃れたいと願うに違い有りま

せん。七宝などの全ての備えは、

父の慈愛によつて施されている

ことを知らぬ子は、全てが自分

を縛るものには見えないうし、

「金の鎖」とはそれを象

徴するものでしょう。

阿弥陀如来のはたらきを疑う

人は、如来のお慈悲の只中にあ

りながら、仏心を解せず、苦惱

を繰り返します。これを案じら

れる阿弥陀如来は、姿は同じ七

宝莊嚴の世界に迎え入れ、仏心

に出遇う縁が熟するよう育まれ

るのです。

「そのもとの罪をしりて、深

く自ら悔い責め、かのところを

離れんことをもとめば…」と、

釈尊は、疑心の人も一切のい

ちを包む阿弥陀如来の智慧のは

たらきに目覚めて、真実の信の

世界に至ることを勧められます。

智慧は備わることがないとも説かれるのです。

この世間を様々な事情の中に生きる私たちですが、どのよう

なものを抱えていようが、どの

ような姿であろうが、このまま

の私を浄土に生まれさせて、仏

に変えなして下さる阿弥陀如来

です。このはたらきの中にあつ

て尚、自身の姿を嘆いたり、重

ねた善行を誇つたり、我が力で

励んで浄土往生を願うならば、

お浄土の莊嚴の中に生まれて

も、仏を見奉ることも、経法を

聞くことも、菩薩方の姿に遇う

こともなく、仏を供養する由縁

もありません。そこには浄土の

聖衆の喜びである衆生を救うと

いうはたらきもないのです。

お経にはそのような状態を、

転輪王の王子が王に背いて七宝

の牢獄に閉じ込められ金の鎖で

